

六条御息所試論

—物の怪となった女の果たす役割について—

齊 藤 みすず

はじめに

六条御息所は夕顔巻で六条付近に住む高貴な身分で、光源氏より年上の女性という属性しか語られず、葵巻で「御息所」として新斎宮である前坊の姫宮の生母として、境遇が新しく付加されて登場する。そして生霊となって葵上を死に追いやり、野の宮で光源氏との別れを経て、終に滯標巻で死に至る。後には死霊となって物語表面に登場してくるのは若菜下巻であった。御息所は物語の中での登場場面は多くはない中で、謎の登場の仕方や、賢木巻での年立ての矛盾等の問題が付きまといっている。さらに物の怪が正体を明らかにされ、その人物が特定されるのは御息所のみであり、特異な存在として御息所描写の中で少なからぬ部分を占めている。

六条御息所は夕顔・葵上・朝顔・紫上・女三宮など『源氏物語』の主要な女君たちの運命を左右するだけでなく、生霊・死霊となって光源氏の人生に深く関わりを持つ存在として描かれる。物語に登場した時には、すでに源氏との破綻が示され、その上彼女の心深さ・内向性そして人笑へに対する性情等が、彼女を一層悲劇に陥らせる要因と

なって語られてくる。光源氏への御息所の激しい情念が、むしろ源氏を遠ざけることになり、そこに「一夫多妻制がもたらした女の悲劇」によって御息所の分裂した心情が「物の怪」を生む契機となったことは否めない。物の怪を御息所その人に結び付けて描き出されるとき、そこには物の怪にならざるを得ない女の性の悲しさをまぎ／＼と見せつけられるのである。その六条御息所の人物造型にあたって、物語作者は物の怪という特異な手段を用いて、光源氏の人生にどのように関わらせ、源氏の人間性を浮き彫りにする手段をどのように描ききったか。本論文では、先行研究を参考にしながら、この点について物語における六条御息所の役割について考察を試みたい。

尚、『源氏物語』本文の引用は以下全て新日本古典文学大系『源氏物語』（柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注 岩波書店刊）により、巻と頁数を記した。

一 六条御息所の登場

夕顔巻に始まる六条御息所の物語は、冒頭光源氏の「六条わたりの御忍びありき」（一〇〇）と記述されるところから始まるが、この時点ではまだ六条御息所が源氏の通いどころの一人として明らかにされることは無い。

尚、「六条わたり」なる言葉は、夕顔巻に三例、末摘花巻に一例、また「六条京極わたり」は若紫巻に一例、少女巻にも「六条京極のわたり」が一例記されている。『河海抄』²⁾には、

伊勢物語昔左のおほいまうち君いまそかりけりかもの河のほとりに六条わたりに家いとおもしろくつくりてすみ給けり

と『伊勢物語』八十一段を引いていること、「左のおほいまうち君」と呼ばれた河原左大臣源融が「六条わたり」

に趣味を凝らした邸宅に住んでいたことが示されている。又、『今昔物語』卷二十七には、次のように記されている。^③

一 今昔、川原ノ院、融ノ左大臣ノ造住給ケル家ナリ、陸奥ノ國ノ塩竈ノ形造テ、潮ノ水ヲ汲入テ、池ニ湛ヘタリノ様々ニ微妙ク
可咲キ事ノ限ヲ造テ住給ケル・・・

二 然テ院ノ住給ケル時ニ、夜半許ニ、西ノ臺ノ塗籠開テ、人ノソヨメキテ參ル氣色ノ有ケル院見遣セ給ケル日ノ装束直ク
人ノ大刀帯ヲ笏取、畏テ、二間許去ケテ居ルヲ・・・(中略)・・・靈、搔消ッ様ニ失リケ

右の(一)では、源融の大邸宅河原院が、景勝地陸奥国・塩釜の庭園を模して作られていたことが記されている。『伊勢物語』八十一段や『今昔物語』から、源融の邸宅が六条わたりに位置していることと、御息所の邸が六条にあることが重なってくる。そして、「なにがしの院」の準拠が河原院であることが指摘できる。同時に、(二)には、河原院には怨霊説話があることが示されている。ここでは「靈、搔消ッ様ニ失リケ」とあり、夕顔卷でも同じように「夢に見えつるかたちしたる女」(一二四)が「面影に見えてふと消えうせぬ」とあることから、靈の去り方にも、その説話をモデルとして六条御息所の物の怪が造型されたものと考えられる。

「六条わたりの御忍びありき」と語られたその後で、「六条わたり」の女について記されるのは、「木立、前栽などなべての所に似ず、いとのだかに心にく、住みなし給へり」(夕顔——一〇五)とあり、壮大で優美な住居の有様や、心にくい生活を送っている優雅で高貴な女性であることが語られている。一方、夕顔の住居は「門は葺のやうなるを仕上げたる、見入れのほどなくものはかなき住まひ」(同一〇〇)であり、六条わたりの女の住居に比べれば小さく粗末なものであることの比較が為されている。

夏から秋へと季節は変わり、源氏と「六条わたり」の女の現在の関係が示されている。

六条わたりにも、とけがたかりし御けしきをおもむけきこえ給てのち、引き返しなめならんはいとをしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうにあなたがちなる事はなきも、いかなる事にか、と見えたり。女は、いとものをあまりなるまでおぼしめたる御心ざまにて、齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとゞかくつらき御夜離れの寝覚め、おぼししほるゝこといとさまゝなり。霧のいと深きあした、いたくそゝのかされ給て、ねぶたげなるけしきにうち嘆きつゝ出で給ふを、中将のおもと、御格子一間上げて、見たてまつりをくり給へとおぼしく御き丁引きやりたれば、御頭もたげて見出だし給へり。

(夕顔——〇九)

右の記述から、二人の關係が生じてから間もないうちに、すでにその關係は破綻していたようである。源氏が一時熱中して近づき、容易に応じなかつたのを長い時間をかけて口説き落としたこと、しかし、今では彼女に対して極端に不熱心なこと、彼女の度が過ぎた物を思い詰める性格、源氏より年上であることが恥ずかしく辛いと思つてゐることや、夜離れが続いていることが詳述されている。特に「齡のほども似げなく」思う彼女は、「人の漏り聞かむに」という夜離れに苦しんでゐることに對する人の噂や評判を氣に病んでゐるのである。久しぶりの源氏との逢瀬であつた霧深いある朝、「いたくそゝのかされ・・・」とするあたりにも、その言葉とは裏腹に少しでも源氏を引き留めたいのに、人の目を氣にする女の悲しい心遣いが見出され、いわば『蜻蛉日記』作者の兼家に対する態度や心情と似通つたところが見受けられる。

この後に源氏と邸内の侍女中将のおもとの、朝の戯れの場面へと続く。そこには洗練された立ち居振る舞いや、才氣を備えた一女房が描出され、この邸に住む使用人の質の高さが示されてゐると同時に、この邸の女主人の風格や財力の高さを物語っている。

こうしてみると、「六条わたり」に住む女性の輪郭が夕顔巻で徐々に明らかにされ、六条御息所の身分や素性を

除けばほぼ語り尽くされているということが出来る。だが、「六条わたり」の身分や素性がなぜ明らかにされないのか。玉上琢也氏は「物語は語られざる部分によって支えられている」と語っているように、夕顔巻で御息所が一体どのような身分で、どのような素性の人物かを臆げにすることに、廃院に現れた物の怪の正体、それを読者に想像させるという作者の構造上の仕掛けであると見るのもあながち間違いではなかるうと思う。

二 夕顔巻の物の怪の効果

よひ過ぐるほど、すこし寝入り給へるに、御枕上にいとおかしげなる女いて、「をのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人をいておはしてときめかし給こそいとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかきをこさむとす、と見給。物におそはるゝ心ちしておどろき給へれば、火も消えにけり。

(夕顔―一二二)

この「おかしげなる女」なる物の怪の正体をめぐって様々な論議が為されてきたが、いまだ解決は見られていない。『無名草子』は「浅ましきこと。夕顔の、木魂に取られたること」としており、木の精霊の仕業としている。又、大系本脚注には「物」は、何かの霊的存在、物の怪「すなわち、なにがしの院に住む妖物の仕業としている。萩原広道氏は『源氏物語評釈』⁽⁵⁾に、「この院に住める妖物の御息所の様になりて現はれたるさまと心得べき」と述べている。その他、生霊説を否定し妖物説を掲げるのは深澤三千男「夕顔怪死事件についての一考察」(『源氏物語の形成』桜楓社 昭和四七年)や玉上琢弥「平安文学の読者層」(『源氏物語研究』角川書店 昭和四一年)などである。

一方、多屋頼俊氏は「源氏わ何の警戒もない某の院で（御息所も）いかに思ひみだれ給ふらん。恨みられんに、苦しう、ことわりなり」とおもわれながら、夕顔と枕を並べられる。それが生霊お呼び出したのである。」と、「おかしげなる女」を御息所の生霊と見ている。又、花鳥余情にも「これは六条御息所の事也源氏の君の思くらへ給へるによりて邪気になれるにや」として、六条御息所の生霊説をとっている。

又、西郷信綱氏の『西郷信綱著作集』⁽⁶⁾には、「作者はむしろ意識して醜写しており、御息所もあくまで影のごとく源氏の心内に棲みこんでいるわけで、だからまた、幻に見えた女を御息所でないといいきるのもゆきすぎである。ないかのごとく、あるかのごとく、いわゆる虚実皮膜の間に人物や場所の関係を設定し、おぼめかしている点に、昔物語や説話の世界にはない独自性がある」と、生霊説、妖怪説を交錯させた考え方をしている。このように、「物」は某院に住む「妖物」、御息所の生霊、または、そのどちらとも決めかねるといふ、先行研究を大別すれば、おおよそ三通りの捉え方がある。

本稿では、某院の物の怪と葵巻の物の怪とは区別しておきたい。なぜなら、葵巻での御息所が苦悶が昂じての生霊と化する場面が、リアルで生々しく描かれるのに対し、夕顔巻では、いとも簡単に現れあっさり退場することの相違から、葵巻での生霊と同一視する読みは適切とは言えない。実際、夕顔巻の物の怪の正体は曖昧で、物の怪出現後に当事者たる源氏が六条わたりの女を想起していないし、枕上に立つ「いとおかしげなる女」を確認したに留まっている。それに、源融の河原院をイメージされる某院の荒れ果てた状況が設定されていることが背景にあり、当時は人を食うと信じられていた「鬼」⁽⁹⁾などを源氏が想起していることを考えれば、ここに現れた物の怪の正体は、六条わたりと言いつるにははなはだ抵抗を感じる。従って、本稿では物の怪の正体については、「妖物」と捉えておきたい。

ところで某院の物の怪は、ただ夕顔の命を奪う為だけの役割を担わされていたのだろうか。そこには作者の周到に用意された思惑が見えてくる。物の怪が現われるのは「六条はたりもいかに思乱れたまふらん、うらみられんに苦しうことほりなり」(夕顔―一二二)との思いが源氏の心に浮かび、夕顔を目の前にして「いとをしき筋はまづ思ひきこえ給。何心もなきさし向かひをあはれとおぼすまゝに、あまり心ふかく、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばや」(同一二二―二二)と、夕顔との比較をし、六条わたりの人柄を否定的に捉えたそのすぐ後のことである。つまり作者は物の怪の正体について、読者に六条わたりの女をイメージさせるような筋道を立てているのである。

ともあれ、物の怪の正体は諸説あり断定することは出来ない。だが夕顔巻で語られる御息所の尋常でないほど物思い詰める性情が語られていることから、作者は遊離魂の物語へと展開していくことを暗示しうるとどまり、夕顔巻の物の怪の正体を明かすことは無い。

三 「前坊の御息所」としての描写の効果

葵巻に至ると、今まで臆げであった六条わたりの女の素性が初めて明らかにされる。

まことや、かの六条の御息所の御腹の前坊の姫君、斎宮にゐ給にしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御有さまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてよりおぼしけり。(葵―二九〇)

内容は前坊（前坊）の未亡人、その間に設けた姫君の斎宮卜定が明記される。しかも源氏との愛を断念し伊勢下向を考えられていることも示されている。実は六条御息所という呼称は、この葵巻一例のみである。ここで「かの六条の御息所」

と「かの」を使用することにより、夕顔巻の六条わたりの女と、六条御息所は「六条」を共通語としており、同一人物だったのだと改めて読者は気づかされるのである。

又、前坊と御息所の結婚時期について御息所の年齢・身分それにその略歴が記されている中で、一つの疑問が生じている。

伊勢下向当日、御息所母娘が参内し御息所が半生を回顧する。「父おとゞの、限りなき筋におぼし心ざして、いつきたてまつり給しありさま変はりて、末の世に内を見給にも、物のみ尽きせずあはれにおぼさる。十六にて故宮にまいり給て、廿にてをくれたてまつり給。卅にてぞけふまた九重を見給ける」（賢木―三四九）と、父大臣が皇后の位にもと望んで娘を十六歳で入内させたにも拘らず、その春宮は二十歳でこの世を去り、御息所のその後の不遇な人生が示されている。「斎宮は十四にぞなり給ける」（同三五〇）とあり、その春宮の忘れ形見が今は十四歳である。現在御息所は三十歳、源氏二十三歳¹⁰⁾。御息所が入内した年、源氏は九歳である。桐壺巻で源氏四歳の時、「坊定まり給」（桐壺―一八）と記されているように既に弘徽殿女御腹第一皇子が立坊していたのである。ここに矛盾が生じ、「前坊」であった時期への疑問が生じるのである。このことについて近年源氏物語研究では、原作者の構想上の破綻であるとするのが殆ど定説化している。この矛盾に対し多屋頼俊氏は次のように説明する。「この弟宮わ第一皇子の立太子以前から「前坊」であったので、御息所わ十六歳の時に、この「前坊」の御息所になられたのであり、翌年「前坊」の姫君お産まれたのである。そして御息所の廿歳の時に、この「前坊」が「故前坊」になられた」とされた。この説について、増田繁夫氏は「年紀上の両巻の記事の矛盾を合理的に解決しようとしたものである¹¹⁾」とも言い、「この説明は物語の本文に注意すれば成立する余地はないように思われる」と述べている。確かに増田氏が言うように、賢木巻で御息所の父大臣は、「限りなき筋におぼし心ざして」いたのであり、娘が皇后

の位に就くことを期待していたことを示すものであり、その希望が閉ざされている「前坊」と娘を結婚させることには矛盾が感じられる。御息所が齋宮に付き添って参内した時には、「卅にてぞけふまた九重を見給ける」「そのかみをけふはかけじと忍ぶれど心のうちにもぞかなしき」（賢木―三四九）と東宮妃時代を回顧して「もののみ尽きせずあはれ」（同）に思うのである。すなわち御息所は東宮が薨去するまでは内裏に住んでいたと思われ、「前坊」と結婚したとすることは無理なように思われる。従って、増田氏が「御息所が「前坊」と結婚したとして解決しようとするのは無理で、桐壺巻と賢木巻の記事が矛盾する」と語られることは理に適していると思われる。

六条わたりから六条御息所へと変身した人物の紹介に続いて、源氏の女性関係について父である桐壺院の叱責の場面がある。

院にも、かゝることなむと聞こしめして、「故宮のいとやむごとなくおぼし、時めかしたまひしものを、輕くしうをしなべたるさまにもてなすながいとおしきこと。齋宮をもこの御子たちのつらになむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負いぬべきこと也」など御けしきあしければ、わが御こゝちにもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひ給。

（葵―二九一）

ここには御息所を思いやる桐壺院が「御けしきあし」く不快感をあらわにし、源氏を叱責する姿が描かれている。そして、御息所の身分柄も「輕くしうをしなべたるさまにもてなす」ことはならぬと、その粗略を「かくすきわざする」と断じ、自分が尊崇の情を抱いている女性を、源氏が不幸に陥れていることが不快であり、源氏に反省を促しているのである。院は東宮妃として時めいていた頃の御息所を知悉する人である。故宮は桐壺院の弟であり、次期天皇である。その寵妃への同情からなのか、それとも父親のない姪を不憫に思っただけなのかは判らないが、「齋

宮をもこの御子たちのつら」に数えんとする院の行為については、御息所への同情以上の感情が込められているものと思われる。そうした院の御息所への好意がどのようなものであったのかは、葵上の死後、生霊の件を仄めかした源氏の返信を御息所が読んだ場面で、読者に明らかにされる。

「その御代はりに、やがて見たてまつりあつかはむ」など常にの給せて、「やがて内住みし給へ」とたび／＼聞こえさせ給しをだに、いとあるまじきことと思ひ離れにしを、かく心よりほかに、若／＼しき物思ひをして、つるにうき名をさへ流しはてつべきこと、とおぼし乱るゝに、なお例のさまにもおはせず。

(葵―三一六―七)

桐壺帝の言葉は前坊の身代わりに自分の寵愛を受けるように暗に誘う言葉が度々語られていたことが明かされる。御息所に桐壺帝の再三の申出を退けさせたのは、自らの人生の終わりを自覚した為だったのである。同時に、東宮妃時代に栄華に包まれた輝かしい日々を享受した彼女にとって、東宮の死という不測の事態によって、御息所の中に未来の皇后たり得た東宮妃としての地位が潰えてしまった挫折感も抱いていたことが想像される。桐壺帝の好意に対して「いとあるまじきこと」(同三一七)とする思いも、以後の人生を、東宮妃としての誇り高い精神を完結しようとする強烈な意思であったと思う。そうした彼女が何故源氏の「軽／＼しうをしなべたるさま」のもてなしを許容し、元東宮妃としてのあるべき生活に戻ることをも断念し、恋の憂悶に閉じ込められるようになってしまったのか。桐壺帝の善意の心寄せを拒絶し人生を断念した筈の自分が、今源氏への恋という落とし穴に嵌ってしまったという事実が御息所の精神を不安定にしていくな。その御息所の心とは裏腹に、彼女の高貴さを著しく傷つける源氏の待遇が、帝をはじめ宮廷世界に限なく知れ渡り、「うき名」を流す羽目になったことが御息所にとって最も恥ずべきことであったのである。それが元東宮妃としての名誉を失墜させ、御息所を追い詰めていく要因となってい

る。こうした彼女の精神と煩惱の葛藤の描写は、車の所争い事件を機に生霊と化し、その果ての伊勢下向という切羽詰まった選択を強いられることになるその後の展開の伏線となっているのである。

夕顔巻での「六条わたり」が、葵巻になって六条の「前坊の御息所」と紹介され直し、彼女は最早影の存在でなく、六条御息所として舞台の前面に押し出されてきたのである。その御息所の深い苦悩に満たされた愛の物語は、伊勢下向という形で彼女を退場させ一つの結末を迎えるが、この物語の構造に「前坊の御息所」としての描写が活かされている。

四 「葵巻」における生霊の役割

生霊事件の発端となったのは、新斎院御禊の日の車の所争いが原因であった。事件は葵上一行が己の権勢に物を言わせ、乱暴狼藉を働いたことにより御息所を逆上させるに十分な恥辱を与えた。その事件の一件以来、「物をおぼし乱るゝ事、年ごろよりも多く添ひ」（葵―二九九）、起き臥しも思い煩い「御心ちも浮きたるやうにおぼされて、なやましう」（同三〇〇）と、事件後の御息所の懊悩が記され、病的な精神の変調をきたしていることが示されている。葵上方には「大殿には、御ものゝけめきていたうわづらひ給へば」（同三〇〇）と憑霊騒ぎが描写され、御息所の苦悩と密着した形で展開していく。「ものゝけ、いきすたま」（同）など、多くの物の怪が「名のり」（同）をする中で、憑坐に移らずに葵上に取憑く執念深い「物」がひとつだけあり、葵上の病状はいよいよ急迫を告げる。出産を控えて苦しむ葵上に物の怪が正体を現す場面は、実にリアルであり、源氏自身が御息所の生霊と知る描写は、臨場感あふれる名場面で知られている。

この後、葵上は「例の御胸をせきあげていたうまどひ」(同三一)で死に至るのである。葵上に憑いていたその物の怪の正体は、「御いきずたま」「故父おとゞの御霊」(同三〇三)と御息所かその父親であろうことが噂に上っていた。大系本脚注は「御息所の父は大臣だったが左大臣を恨んで死んだ政治的な敗北者」と推測している。確かにここで初めて紹介される「故父おとゞの御霊」とは、この時代には御霊信仰が盛んになり「当時の貴族社会の陰險な政治闘争の犠牲になって死んだ人間の怨念が祟るという思想」があり、物の怪は、多くの場合政治的怨念が主であった。そのことに照らし合わせ、今を時めく左大臣家とすでに没落してしまった御息所の父大臣家との、かつての権力闘争があったことを推測し論じる先学もある¹⁵⁾。しかし、物語ではそのことについては明らかにされていない。が、故父大臣の左大臣家への怨念を裏付ける事実がなければ、噂にさえならなかったであろうから、これは事実の裏付けを想定する解釈として成り立つのではないだろうか。御息所の様に「物の怪」となって他人に取り憑くという考えも、この御霊信仰を背後に持つものとも考えられる。そのような解釈が成り立つならば、御息所は無意識のうちに家霊と関わり、いわば怨霊の家系の代表でありえたことになる¹⁶⁾。だが、葵上と御息所の車の所争いは、政治的な怨恨ではなく、源氏をめぐる激しい女の執念ともいうべき争いであった。多屋頼俊氏は生霊の主体について「恋慕や嫉妬、怨恨等の情で悶々として、精神の統一が弱まると、その乱れた心お依所として活動を始める」と述べているように、御息所の「物思ひにあくがるなるたましひ」(同三〇四)は、「かの姫君とおぼしき人のいときよらにてある所に行きて、とかくひきまさぐり、うつゝにも似ず、猛くいかきひたふる心出で来て、うちかなぐる」(同)姿は、自分の意志ではどうにもならぬ苦しみとして語られている。

もとより平安時代の歌には、しばしば物の怪が跳梁する。作者と同時代の和泉式部の名歌にも、

物思へば沢の蛸もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

(後拾遺・雑六)

とある。沢に飛び交う螢の火も、自分の身から離れ、彷徨い出た魂かと、うつろに眺めている不気味な表現である。御息所の物の怪も、この時代特有の想像力によって造型されているものと思われる。

葵上は、この物の怪に苦しめられながらも男児出産を果たし、ついに二十六歳で死んでゆく。葵上の死の前後は、かつての不幸な妻と夫のために、最後の幸福な一瞬を描き出している。

白き御衣に色あひいとはなやかにて、御髪のいと長うちたきを引き結ひてうち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたる方添ひておかしかりけれと見ゆ。御手をとらへて、「あないみじ。心うきめを見せ給かな。」とて、物も聞こえ給はず泣き給へば、例はいとわづらはしうはづかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもりきこえ給に、なみだのこぼるゝさまを見給は、いかゞあはれの浅からむ。(同三〇六)

葵上の死の直前において、改めて妻の美しさを思い、葵上もまた、初めて源氏の愛情に触れた喜びの表情を見せる。源氏の愛情に満ちた言葉や思いやりには、葵上のこれまでの不幸を忘れさせるに充分であった。葵上は高貴な家に生まれ、幸福な結婚生活を約束されていたはずであったが、自らの性格と、物の怪という恐るべき対抗者によって敗退せざるを得なくなったのである。

さて葵上の死後、源氏に最早顧みられなくなった御息所は、失意のまま伊勢下向という半永久的別れを決意する。ところで作者は、なぜ御息所を離京という形で物語から退場させようとしたのか。池田亀鑑氏は、「この人物の筋の上の活躍は葵巻からであって、ここで紫の上と源氏との結婚が初めて可能となり、「紫」すなわち藤壺のゆかりが女主人公として物語の全構想の上に生きてくる。この六条御息所という女性が、藤壺と、それから小さな藤壺としての紫の上とを二重うつしにするために、葵の上を強いて排除するという不幸な宿命を負わされて登場する」と述べている。これは御息所が生霊になって葵上を排除し、紫上の存在を浮上させる役割があったことを論じたも

ので、まさに的を射たものである。確かに、御息所の生霊は源氏の正妻葵上を死に至らしめ、物語から退場させる。さらに朝顔の姫君については、「かゝる事を聞き給にも朝顔の姫君は、いかで人（御息所）に似じ」（同二九二）と、深く心に期すものがあつたと語られていて、彼女も源氏を拒み、斎院となつて源氏から離れている。御息所自身も娘が斎宮に卜定され伊勢へ下向する。これら一連の流れが御息所をも含めた「上の品」の女性が、源氏の周りから姿を消すことによつて、はじめて紫上は物語の前面に押し出されてくるのである。つまり、紫上を物語に浮上させ、源氏との深い愛情物語を語るには、紫上のライバルとなる女性を一掃させる必要があり、御息所はその役目を果たす役割を与えられていたのである。

五 「若菜下巻」における六条御息所の役割

御息所が源氏物語に占める役割とその意味について、先行研究には様々な見解がある。「（御息所の死霊が）源氏の代わりに紫上に憑くことにより六条院の調和的世界が破綻に導かれるのを、すでに源氏は防ぐことができないという絶対性の後退^⑨」という見方や、「六条御息所が源氏物語の中に占める役割は、光源氏の女性遍歴における罪障意識を主題とする点にある^⑩」、あるいは「この物の怪の存在は、源氏の人生を相対的にとらえ直してみせる物語の目でもある^⑪」等、御息所を光源氏の人生に結び付けて捉える言葉は少なくない。そこで「若菜下」「柏木」巻に登場する御息所の死霊に与えられている物語的意味を考えてみたい。

葵上の死後、娘の斎宮に付き添つて伊勢に下つた御息所は、六年後代替わりのため帰京する。とかくするうち俄かに重く患ひ、源氏に娘の後見を依頼し、七八日ばかりして死ぬ。それから十数年後、御息所は死霊となつて紫上

に激しく取り憑く。その時紫上は、太政天皇に準ぜられ、栄華を極める源氏と仲睦まじく過ごしていた。ところが女三宮の源氏への降嫁により、その調和は突然破られる。

さて、朱雀院の五十の賀の延期に先立ち、六条院で女樂が催され、翌日、源氏は御息所について紫上に次のように語る。

中宮の御母御息所なん、さまことに心ふかくなまめかしたためしには、まづ思ひ出でらるれど、人見えにく、苦しかりしさまになんありし。うらむべきふしぞ、げにことほりとおぼゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨せられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるひなくはづかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕のむつびをかさはさむには、いとつゝましき所のありしかば、うちとけては見落とさるゝ事やなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし中ぞかし。いとあるまじき名を立ちて、身のあはしくなりぬる嘆きを、いみじく思ひしめ給へりしがいとおしく、げに人がらを思ひしも、我罪ある心ちしてやみにし慰めに、中宮を、かくさるべき御契とは言ひながら、とりたてて、世の誹り人のうらみをも知らず、心寄せたてまつるを、かの世ながらも見なおされぬらむ。今もむかしも、なをざりなる心のすさびに、いとおしくやしき事も多くなん

(若菜下―三五―二)

右の文は御息所の美質を挙げながら、付き合いくく息が詰まるような人としての位置づけをし、更に御息所の自分への恨みは無理もないとしながら、御息所の性情がいつまでも思い詰めて執念深いことが、源氏にとっては辛いことであったと御息所の性情を批評する。そして、人柄を思い、自分にも罪があるとし、その罪滅ぼしに秋好中宮（前斎宮）に精一杯の後押しをしている。今では御息所もあの世ながらも見直してくれているだろう。というものである。夕顔巻では源氏は十七歳。夕顔を目の前にして「いとをしき筋はまづ思ひきこえ給。何心もな

きさし向かひをあはれとおぼすまゝに、あまり心ふかく、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばや」と思つた源氏も、すでに三十年の月日を経て御息所に対する気持ちには変化が見られない。若菜下巻で源氏は、御息所との決して立ててはならない浮名を立ててしまったことに對する罪を自覚しながらも、御息所の人柄を理由に自己弁護へと話は進む。そして秋好中宮への手厚いもてなしで全てが決着したかのように語る。これは源氏の独りよがりの解釈からの言葉と言えるであらう。

御息所の死霊が現われたのは、源氏が紫上に彼女のことを悪しざまに語つたのが直接のきっかけになり、発病した紫上に御息所の死霊が取り憑くのである。そして死霊は源氏に次のように語る。

中宮の御事にても、いとうれしくかたじけなしとなん、天翔りても見たてまつれど、道異になりぬれば、子のうまでも深くおぼえぬにやあらむ、なをみづからつらしと思ひきこえし心の執なむ、とまるものなりける。そのなかにも、生きての世に、人よりおとしておぼし捨てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからずにくかりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いとうらめしく、いまはたゞ亡きにおぼしゆるして、こと人の言ひおとしめむをだに、はぶき隠し給へとこそ思へ、とうち思しばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かくところせきなり。この人を深くにくし、と思きこゆることはなけれど、守り強く、いと御あたりとをき心ちして、え近づきまいらず、御声をだにほのかになむ聞き侍る。よし、いまはこの罪のかるむばかりのわざをせさせ給へ。修法、読経とのゝしる事も、身には苦しく、わびしき炎とのみまつはれて、さらにたうときことも聞こえねば、いとかなしくなむ。中宮にも、このよしを伝へ聞こえ給へ。ゆめ宮仕へのほどに、ひとときしるひそねむ心つかひたまふな。齋宮におはしまししころほひの、御罪かるむべからむ功德の事をかならずせさせ給へ。いとくやしきことになむありける。

(若菜下―三七二―三)

ここでは死霊の執念を語ってはいるが、秋好中宮に対する源氏の後見を感謝する言葉など、明らかに生前の御息所そのものである。この死霊の台詞に従えば、紫上の直接の恨みはなく、源氏に憑きたいのだが神仏の加護が強くて近づけないためやむを得ず紫上に取り憑いたという。

大朝雄二氏の「物怪自体の意志がどうあるうとも、紫上発病と女三宮柏木事件とは盾の両面のように密接にからみ合って展開していく」というように、紫上の二条院静養が、やがて柏木が女三宮の許に忍んでいくという状況が作り出される。そして、紫上の病によって源氏は妻（女三宮）を奪われるという皮肉な問題に直面することになり、死霊が「守り強く、いと御あたりとをき心ちして、え近づきまいらず」という源氏の超絶性が示されていたものが、ここにて明らかにその限界が見られるのである。

柏木巻で女三宮出家後に再び死霊が登場する。

かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと一人をばおぼしたりしが、いとねたかりしかば、このわたりにさりげなくてなん日ごろさぶらひつる。いまは帰りなん
(柏木―一九)

と言って笑う死霊は、復讐の鬼のような気味悪ささえ醸し出す。「かうぞあるよ」は「かようにあるのだよ」あるいは「それごろんなさい」と言ったところか、源氏をあざ笑う。「いとかしこう取り返しつと一人をばおぼしたりしが」とあるのは、紫上が一命をとりとめた事を指しているのであるから、この物の怪は御息所の死霊と分かるのである。さらに「日ごろさぶらひつる」と言うのは、「若菜下」で「さらにこのもの、け去りはてず」(若菜下―三七六)と記されているように、紫上への憑霊はそのまま調伏されることなく取り憑いていたのであるから、女三宮にそのまま取り憑き、出家に導いたのはこの物の怪であったことが明かされる。

初めから死霊が「うち笑ふ」という姿で登場したのならあまりにも唐突であると言わざるを得ないであろう。し

かし、すでに若菜下巻で恨み言を並べ、娘の今後や、自分への供養を依頼した時の御息所的なものと、悪魔的なものとの死霊の姿が描かれているのである。なぜ、こうした悪魔そのもののような姿で、御息所は登場しなければならなかったのであろうか。葵巻の物語に遡ってみると、御息所の悲劇的な人生が描かれ、結果として源氏への哀愁の念を残したまま、逃げ去るように源氏の前から去っていった。その御息所が再び死霊となって現れたのは源氏が紫上に語った「心よからずにくかりしありさま」と御息所への批評であった。さらに御息所に対する源氏の姿勢を、亡き者を庇わぬ、思いやりと情愛の欠如を伴わせ持っていたことが御息所の死霊からの言葉に示されている。実は御息所は源氏の人生にひそかに寄り添いながら、源氏に取り憑く機会を待っていたのである。そこには御息所の決して癒されることのない源氏への恨みともいうべき感情の発露からの死霊の姿があった。

御息所の霊は紫上から女三宮へと取り憑き、ただ彼女を出家させ、源氏に思い知らせるのが目的であった。だが馨を残しての女三宮の出家と柏木の死が同時に進行し、源氏の前からの両人の退場により、残された薫をいやが上にも抱かねばならぬ現実を源氏に突き付けたのである。それは「さてもあやしや、わが世とともにおそろしと思ひしことの報いなめり」（柏木一一）と、以前の藤壺との関係を源氏に思い起こさせることになり、因果応報という形で源氏に襲い掛かったのである。もともと女三宮を迎えることが源氏の優越性を際立たせることになった反面、若菜上巻での女三宮の降嫁と明石女御の皇子出産の狭間で、いかなる身寄りも持たない紫上の境涯が展開する中で、その帰結として彼女を孤立化させていったところに、御息所の死霊が付け入る隙を狙っていたということが出来る。その御息所の死霊のすさまじいまでの執着を厭う源氏は、男女関係における女の情念、ひいては女の心奥に潜む業のすさまじさに戦慄を覚えざるを得ない。このような源氏が、出家を願う紫上に対しての苦しいまでの執着を示している状況は、御息所と変わるところがないと言えるであろう。

多様な女性関係の積み重ねによって栄華を極めていく超絶者としての源氏の人生のその晩年には、御息所の死霊によって、人間であるがゆえに人間執着に対する苦悩を自覚させられていく。ここには最早、嘗ての光輝く様な源氏の姿は見られない。源氏の心底には早くから道心が胚胎しながらも、度々その道心は留保されてきた。しかし、ここに至って宗教的な救済を求める源氏には、最愛の紫上への哀憐執着を断念しない限り救済への道は絶望的と言える。このようにみていると、御息所の物の怪の存在は、超絶者源氏の心の脆弱さを浮き彫りにしたことと、源氏に過去に遡って自身の罪を問い直させる為のものであったと言えるであろう。

八 結び

六条御息所の人物像は、思慮深く、わずかなことにも打ち震える鋭い感受性を持つ人として、その人格の根底に輝かしい過去が形成した一つの強烈な精神を持ち、夕顔巻では既に遊離魂の物語に結び付けられるべき存在として造型されていた。夕顔巻では臙化されて語られたものが、葵巻で初めて前坊の「御息所」と呼ばれ、幼い新斎宮の母親という設定によって登場する。前坊妃が物の怪となっていく悲しい悲劇の背景には、前坊と父大臣の政治的敗退という暗い前歴があって、そこに源氏が「軽くしうをしなべたるさまにもてなす」ことや、「人よりおとして」(前掲)もてなす源氏の冷淡な態度への怨念が物の怪化する要因になっていると考えても不思議ではない。その御息所が生霊・死霊と姿を変えながら源氏の人生に深く関わり、源氏を脅かし続ける。濡標巻で世を去った御息所の死霊が、はるか時を経て若菜下巻、柏木巻で出現し、紫上を発病させ女三宮を出家に導く展開を見せる。この死霊によって終始する薫出生事件は、若き日の源氏に藤壺との密通、冷泉帝誕生という往時の罪の報いを実現させる為

のものであった。

六条御息所の人物像形成という観点から物語を読み直すことにより、哀愁の業に苦悩する御息所の存在が、源氏という人物の人間性を浮き彫りにするために機能していたと捉えることが可能になる。源氏晩年には御息所の死霊の関わりにより、彼をめぐる多様な人間関係が厳しく相対化され、そのことにより源氏は己の過去に復讐されていくのであり、それは、源氏が超人的な存在であり続けることの困難さを鮮明に証しているといえるのである。

注

- (1) 野村精一『源氏物語の創造』（桜楓社 昭和四四年）九五頁
- (2) 玉上琢也編『河海抄』（角川書店 昭和六三年）二三六頁
- (3) 松尾拾「河原院融左大臣靈宇陀院見給語第二」『今昔物語集読解 4 卷二十六・二十七』（笠間書院 平成九年）所収
- (4) 玉上琢也『源氏物語研究』（角川書店 昭和四一年）二四一頁
- (5) 『源氏物語註釈大成（日本文学古註釈大成）』第四卷（日本図書センター 昭和五十三年）
- (6) 多屋頼俊『源氏物語の思想』（法藏館 昭和二八年）一五一頁
- (7) 室松岩雄校訂編輯「花鳥余情」『国文註釈全書』（國學院大學出版部 明治四一年）三六頁
- (8) 西郷信綱「源氏物語の「ものけ」について」『西郷信綱著作集 第6巻 文学史と文学理論Ⅰ 詩の発生』（平凡社 平成二三年）二六六頁
- (9) 「鬼」は「隠顯常ならず、人を害し、人を食ふといふ怪物の名。」とある。（北山谿太『源氏物語辭典 全一卷』）

(平凡社 昭和五三年) 一四四頁

- (10) 御息所の夫前坊について、「湖月抄」(有川武彦校訂『源氏物語湖月抄 上巻』(弘文社 昭和二年)が「坊のうち」に早世し給ふをも前坊と申す也。文彦太子などのごとし」として、文彦太子(保明親王)の例を挙げているように、東宮在位中に天逝した者のことを言うようである。保明親王は醍醐天皇の第二皇子で二十一歳の若さでこの世を去っている。天逝した保明親王は『大和物語』第五段(森本茂『大和物語全釈』大学堂書店 平成五年)には、「前坊の君亡せたまひにければ」とあり、『大鏡』村上帝紀(松村博司校注『大鏡』岩波書店 昭和三五年)にも「前坊をうみたてまつらせたまふ」とあり、「前坊」として登場する。このように「前坊」は平安時代において保明親王を指す言葉であったことが定説となっている。従って、当時『源氏物語』の読者たちは、御息所の夫である前坊は、保明親王をイメージして造型されていたと解しうる。
- (11) 三谷栄一編『源氏物語講座 別巻 源氏物語辞典』(旧年立)(有精堂出版 昭和四八年)
- (12) 同(6)一七八頁
- (13) 増田繁夫「六条御息所の準拠―夕顔巻から葵巻へ―」(論集中古文学5『源氏物語の人物と構造』笠間書院 昭和五七年) 七七頁
- (14) 西郷信綱『増補 詩の発生』(未来社 平成元年) 三一九頁
- (15) 三谷栄一「源氏物語における民間信仰」『源氏物語講座』第五巻(有精堂出版 昭和四六年) 三〇〇頁
- (16) 鈴木日出男『源氏物語虚構論』(東京大学出版 平成一五年) 三五七頁
- (17) 同(6)一一九頁

- (18) 池田亀鑑「長編的各説話の諸相とその成立」
『五頁』 24六条御息所物語」『物語文学Ⅰ』(至文堂 昭和四三年) 一五四
- (19) 大朝雄二『源氏物語正編の研究』(桜楓社 昭和五〇年) 五四三頁
- (20) 森一郎『源氏物語作中人物論』(笠間書院 昭和五四年) 七六頁
- (21) 同(16) 九二三頁
- (22) 同(19) 五四一頁